



よう・かいえい 静岡大学教授。中国・内モンゴル自治区出身。北京第二外国语学院大学アジア・アフリカ語学科（日本語）卒。日本に留学後、国立総合研究大学院大学で博士課程修了。2011年、『墓碑なき草原―内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』で「第14回司馬遼太郎賞」受賞。2000年に日本に帰化。日本名・大野旭（おおの・あきり）。48歳。

静岡大学教授 楊海英氏



さる11月21日にモンゴル国は欧州安保協力機構（OSCE）に加盟した。米国と欧州が中国とロシアの間に楔を打ち込む目的で今回の加盟を主導した、この報道が日本にあった。これは一面的な見方だ。

モンゴルは以前から「われわれはアジアではなく、ユーラシア国家だ」と主張していた。今回の加入も国民に支持された「モンゴル流脱亜論」が背景にあった事実を認識しなければならぬ。同国の政治家の間では、欧州連合（EU）への加盟申請をいかに進めるべきか、との真剣な議論が交わされているのである。

モンゴルがなぜこれほど熱心に「脱亜」的な方向へ進んでいるのかについて、OSCE加盟前の11月14日にウランバートルで行われた「チンギスハン誕生850周年」記念行事が見事にその本質を物語っている。

「強制された」価値観

「モンゴルはチンギスハンの故国」で、その誕生日を国民の休日とする、この決定を同国会は出した。エルベグドルジ大統領主催の華やかな生誕記念式典と国際学術シンポジウムには中央ユーラシア各国からの賓客が数百人も立ち並んだ。「世界のグローバルゼーションは13世紀のモンゴル帝国から始まった。ユーラシアの遊牧民が作り上げた文明は人類の輝かしい遺産だ」と大統領の熱のこもった演説に観衆は数分ごとに拍手で応じていた。

実は今から50年遡った1962年にも、当時のモンゴル人民共和国は「チンギスハン誕生800周年」記念行事を計画していた。しかし、チンギスハンを「侵略者」とみなし、モンゴルによるモスクワ征服がロシアの後進性をもたらした、と信じる。当時のソ連は式典の中止を命じた。チンギスハン記念碑を建立した政治

「ユーラシア国家」モンゴルの戦略

家は暗殺され、モンゴル国民にも社会主義ソ連の価値観が強制されたのである。

ユーラシアをまたぐモンゴル帝国が崩壊した後、子孫たちは多くの国家に分布して住むようになった。中国とロシアだけでなく、カザフスタンとキルギス、それにアフガニスタンなどにも「チンギスハンの末裔」を名乗る人々が住んでいる。彼らもみなモンゴル高原に憧れ、今回の生誕850周年式典にはせま参じた。

アジアにとらわれず

同胞たちを前にして、モンゴルのエルベグドルジ大統領は「ユーラシア諸国家の大同団結」を呼びかけた。「自然を大切にす遊牧文明の共通した価値観を再確認し、豊富な地下資源を武器にともに発展しよう」とのメッセージは、歴史に強烈な誇りを抱くモンゴル国民と各国からの客人たちを鼓舞していた。

中央ユーラシアの遊牧民たちは近代に入ってからツァーの臣民になり、続いて「ソビエト人民」とされた。モンゴル高原もロシアと中国に分割され、今やチンギスハンのホームランドも小さな草原に変化した。それでも、草原の民たるモンゴル人たちが決してアジアという小さな枠組みにとらわれず、ユーラシア規模で国家運営と外交を展開しているのは、強国に挟まれた国家が生き残るための戦略を構築しているからである。こうした知恵は自らの歴史と遊牧文明に源を発している。

日本は19世紀末から活発な中央アジア探検活動を推進してきた。京都の本願寺を拠点とする「大谷探検隊」はシルクロード経由で日本に伝わった仏教伝来の道を再確認し、豊富な学術情報をもたらした。

日本人とモンゴル人は互いに親近感を覚えている。21世紀に入った今日、錯綜した国際環境のなかで、日本はモンゴルなどと連携して再度、文明史に立脚した国家ビジョンを立て直すべきである。

産経新聞, 2012年12月19日 (The Sankei Shimbun, 2012.12.19)

# 時評

楊海英 静岡大学教授

日本にいと、日米関係が日中関係の報道が圧倒的に多く、米中との関係がいかに重要か、常に認識せざるを得ない。米中2カ国に牛耳られている日本はどのように動くべきだろうか。

さる11月14日にモンゴル国の



「チンギス・ハーン生誕850周年」記念行事に招待されて参加した。大統領主催の式典と国際学術シンポジウムには世界各国からの政治家と研究者らが何百人も集まった。なかでも特に注目されたのは中央アジア各国からの参加者た

## モンゴルのOSCE加入

### 米中以外にも視野広げて

ちだ。カザフスタン共和国やキルギスタン共和国にも「チンギス・ハーンの子孫」を名乗る人々が大勢住んでいるし、遊牧文明を共有しているとの認識も強い。大統領もそうした状況を把握し、中央ユーラシア世界の連携を訴えた、情

だ。ギス・ハーン生誕800周年」を祝うための活動を準備していた。しかし、チンギス・ハーンを「侵略者」とみなすソ連は記念活動の中止を命じた。式典を企画し、「チンギス・ハーン記念碑」を建立した政治家も暗殺される結末を迎えた。

熱的な演説を披露した。大国ロシアと中国に挟まれた地域の諸国家が力強く発展していくためのビジョンを明確に示したので、数分ごとに拍手が沸き起こっていた。

一方、ソ連と激しく対立していた中国は華やかな儀式を繰り広げ、「チンギス・ハーンは中華民族の英雄だ」と謳歌した。モンゴル民族の開祖で、世界帝国を切り拓いたチンギス・ハーンは他国に否定されるか、奪われるかの時代が続いた。

「世界のグローバルイニシアチブ」は13世紀のモンゴル帝国期から始まる」と、大統領は自国民と外国からの客人を鼓舞していた。ナシヨナリズム的な言い方のように響くが、日本や欧米の学界からすれば、常識を語ったにすぎない。モンゴルはその後、ロシアや中国に分割されて小国に転落したが、今や確実に復活しつつある。

11月22日、欧州安全保障・協力機構(OSCE)へのモンゴル国の正式な加入が発表された。「アジアではなく、ユーラシア国家モンゴル」を自認している民族が取った戦略である。日本も米中2国に翻弄されるのではなく、世界に目を向けるべきではなからうか。

執筆者略歴

◇やん・はいん氏 内モンゴル出身。日本名大野旭(おの・あきら)。国立総合研究大学院大学博士課程修了。歴史人類学専攻。著書に「モンゴルとイスラームの中国」(風響社)、「墓標なき草原」(岩波書店、第14回司馬遼太郎賞受賞)など。